

街に活気が戻ってきました。子どもたちの歓声が戻ってきました。そして街では、バカンスで太陽の恩恵をたっぷり受け、リフレッシュした人たちも目に入ります。ベルギーでは今月9月が新学年のスタート。幼稚園児も小学生も中高生も、進級して新しい学年をスタートします。しかしみんながみんな進級できるわけではありません。年度末まで繰り返し行われた試験の結果によって進級の判断がくだされます。私事ですが、私の二人の子どもは現地校出身者です。日本の同級生が高校受験や大学受験でたいへんな頃、「君達は入試がないので楽やねえ」と言うのと「その代わり毎年受験してのと同じやからたいへんや」と切り返されました。二人の通った小学校は各学年平均して10%が留年していました。日本でも小学校からの学力判定による留年制度の導入を考えていると聞いています。具体的にベルギーの現状を調べておられた方もいらっしゃると思います。その方とお話したとき、「日本での留年制度の導入は、まず日本社会が留年経験者を普通に卒業した者と同等に扱う土壌が必要かと思う」と生意気に答えました。また留年した挙句、卒業できなかった者たちへの救済処置も必要かと思えます。欧州では卒業資格による職業の選択範囲が定められており、大学卒業者が単純労働に就業できないようになっています。そうして職業上の住み分けを行っているのです。留年は学校教育だけではありません。幼稚園教育でもその子どもの発育によっては、親と幼稚園が同意の上で留年できるシステムもあります。つまり欧州の社会全体が留年の良い部分もあると認識しているようです。

さて教育で一番大切なことは「人の話を聞く習性を見に付けること」だと思います。「人の話を聞く＝人の言いなりになる」ではありません。人の話を聞いてその本質を知り、そしてそれをいかに自分の知識として身に付け、それを知恵として発揮するかが大切だと考えているのです。最近「空気を読めない人」が増えているようですが、その原因の大部分は「人の話を聞いていない」からだだと思います。幼稚園で子どもたちには「人の話を聞くために両方の耳と両方の目に力を入れて、お話ししている人の顔を見ながら聞こうね」と言い聞かせています。実際にこれは本当に大切なことで、折り紙が苦手な子どもも、しっかりと説明を聞き、説明を見て折ると上手に折り紙を折ることができるのです。また子どもたちは聞くことで想像力を高め、頭の中でその話が見えるようになるのです。幼稚園では子どもたちに絵本の読み聞かせや御伽噺、昔話を聞いたりする時間以外にも話を聞く練習時間を取っています。昔大好きだった落語を演ずるまでは行きませんが、子どもたちに披露しています。落語作家の小佐田定雄さんの本に「5分で落語の読み聞かせ」という本を手にとってから始めた企画です。この本は3部になっていて、古典落語を呼ばれているものを約5分で読み聞かせる本です。69席の落語が子どもにも解るように書かれています。それでも「ほんまに子どもが落語を理解できるのかな？」と思っていた時、現役の噺家桂文我さんが書き下ろした「ごくらくらご」を手にして一度やってみようと思ったのがきっかけでした。文我さんがあとがきに書いている中に「子どもに落語はわからん」と言われ、逆に「おやこ寄席」を開き、子どもたちに落語を聞かせたところ、大人と同じくらい、もしくはそれ以上に子どもの方が面白がってラクとの想像(創造)の世界で遊べるのかも知れないと確信されたそうです。そこで私も子どもたちがわかり易い落語から始めたところ、しっかり聞いている子どもは大笑いしていることに気が付きました。そして扇子や手拭などの動き、落語のしぐさなどをしっかり見ている子どもの方が良く笑っていることにも気づきました。「子どもに落語はわからん」というのは大人が勝手に決めたことで、おもしろい話は子どもにもおもしろいんやと思いました。それ以来、ほとんど毎日のように園児から「園長先生、『ちりとてちん』やってえ」「今日は『犬の目』が聞きたいなあ」などのリクエストを聞きながら、短い時間ですが落語を演じています。すると面白いことに、話の中で一番面白い部分を園児たちは覚えてしまうのが解りました。大人の話であると思っていた落語を園児たちが見様見真似で話している。やはり聞くことは記憶へ直結することだなと思いました。

さてこのように真剣に話を聞き語り手の真意や意図を見つけることはとても大切なのですが、ちょっとした話を聞いてあげることも大切なことだと思います。今、大人が忙しく、子どもまで忙しい毎日ですが、この何事にもゆっくりとした時間の流れのベルギーにいる間、少しだけ子どもたちに時間を与えてあげればいかがでしょうか？子どもたちに「今日は何をしたの？ どうだった？ 先生はなんて言った？」などを大人の時間で尋ねることなく、子どもからの話を聞いてあげることが大切だと思います。「園長先生、昨日ね、お家に帰ったら、私の大切にしていた宝物を妹が壊してしまったの。それで妹を叩こうとしたんだけど、まだ小さいから解らないんだなって思ったから、我慢したんだよ」「よく我慢したね。そうだね、小さい子はわからないことが多いからね」などと話を聞いてあげています。子どもも自分の心を発信したいのです。それは親や大人から聞き訊ねられるのではなく、自分の言葉で自分の気持ちを伝えたいということなのです。「あのね、おかあさん。今日ねあきらくんが意地

悪したんだよ。止めてって言っても聞いてくれなかったんだよ」「どうしてそんなことするんだろうねあきらくんは」「あきらくんはいじめっ子なんだよ。だからすぐに意地悪するんだよ」「そうなんだ、他のお友達にも意地悪するの」「ううん、私にだけ。意地悪だけじゃなくて、遊ぶときも私を一番に誘ってくるの。男の子の遊びだからやりたくないの。だからいやだっていうと、意地悪してくるの」「そうなんだ。他のお友達に言ってみた」「言ったけどみんなあきらくんが怖いから何もしてくれない」「先生には」「まだだよ」「じゃあ今度、先生に話してみたら。だって幼稚園では先生がみんなの味方なんだから。」「そうか、わかった！今度されたら先生に言ってみるね」と、言うような会話が夕飯の準備をしているお母さんのスカートの端っこを持ちながら愚痴っている子どもの姿。それが子ども本来の親への甘えの時間なんだと思います。お母さんとの話の中にあきらくんをどうしようという話はありません。「幼稚園であなたを支えてくれるのはお友達と先生なんだよ」とヒントを与えているだけなんです。でもこんな小さな会話が子どもたちの小さな胸をストレスから開放してくれるのです。

日本を離れて生活すると何かとストレスがたまるものです。子どもたちも同じなんです。日本でできていた一人で外出することがなくなり、買物をしていてもお店のおじさんやおばさんと話をすることができなくなり、公園もお気に入りの遊具がない。その公園へも子ども同士では行けないというストレスを抱えているのです。大人のストレスと違い、子どもたちはそのストレスが何なのか会話で説明することができずに困っていることが多いのです。もっともっと、子どもたちのお話を聞いてあげてください。それだけで子どもたちは充分満足することがあるのですから。大人も同じですよ。肩の力を抜いて、些細な愚痴を聞いてもらえる人を探してみましょう。そしてもやもやを吐き出し、楽しいベルギー生活を送りましょう。

《 つづく 》